

ウェブジャーナル『年金研究』論文投稿規程

1. 『年金研究』は公益財団法人年金シニアプラン総合研究機構が刊行する学術専門誌であり、査読付きの日本語ウェブジャーナルです。年金に関心を有する研究者であれば、だれでも投稿することができます。大学院生の投稿も可能です。
2. 投稿論文は日本語のみとし、字数は原則として 10,000～24,000 字とします。この字数は、本文のほかに図・表・注・文献リストなどをすべて含みます。投稿論文に日本語要旨を必ずご記入ください。
3. 投稿可能な論文の範囲は、年金問題に関するすべての研究を含みます。ただし、著者のオリジナルな研究成果を報告したものであり、他のいずれかの雑誌や、その他の発表メディアに掲載（投稿）されていないものに限りません。
4. 投稿はメールでお願いします。そのさいには、メール本文に次の文面を必ず明記願います。「私は、『年金研究』に関する著作権規程の内容を了知し、とりわけ、同規程3の各項に定められた事項について保証します。もし万が一これらの事項に関して問題が生じた場合には、責任を持って処理に当たり、貴機構には一切の迷惑をかけないことを誓約します。」
5. 投稿原稿の採否は、査読結果にもとづき、採否判定会議が決定いたします。
6. 採否の判定基準は、①新たな知見（originality）、②現実との関わり（relevance）、③論理的かつ分かりやすい記述（simplicity）、の3つにあり、それらを総合的に勘案して採否が判定されます。ただし、サーベイ論文の採否は、サーベイの対象となった文献の包括性、手際のよい論点整理、説得力のある展開、等に基づいて判定されます。
7. 投稿原稿は、以下の「原稿作成マニュアル」に沿って作成してください。論文のスタイルがマニュアルと異なる原稿や、読みにくい原稿については、審査の対象外とされますので、ご注意ください。
8. 原稿は、採否にかかわらず、お返しいたしません。

9. 原稿の送信先：

〒108-0074

東京都港区高輪 1-3-13 NBF 高輪ビル 4F

公益財団法人 年金シニアプラン総合研究機構『年金研究』採否判定会議

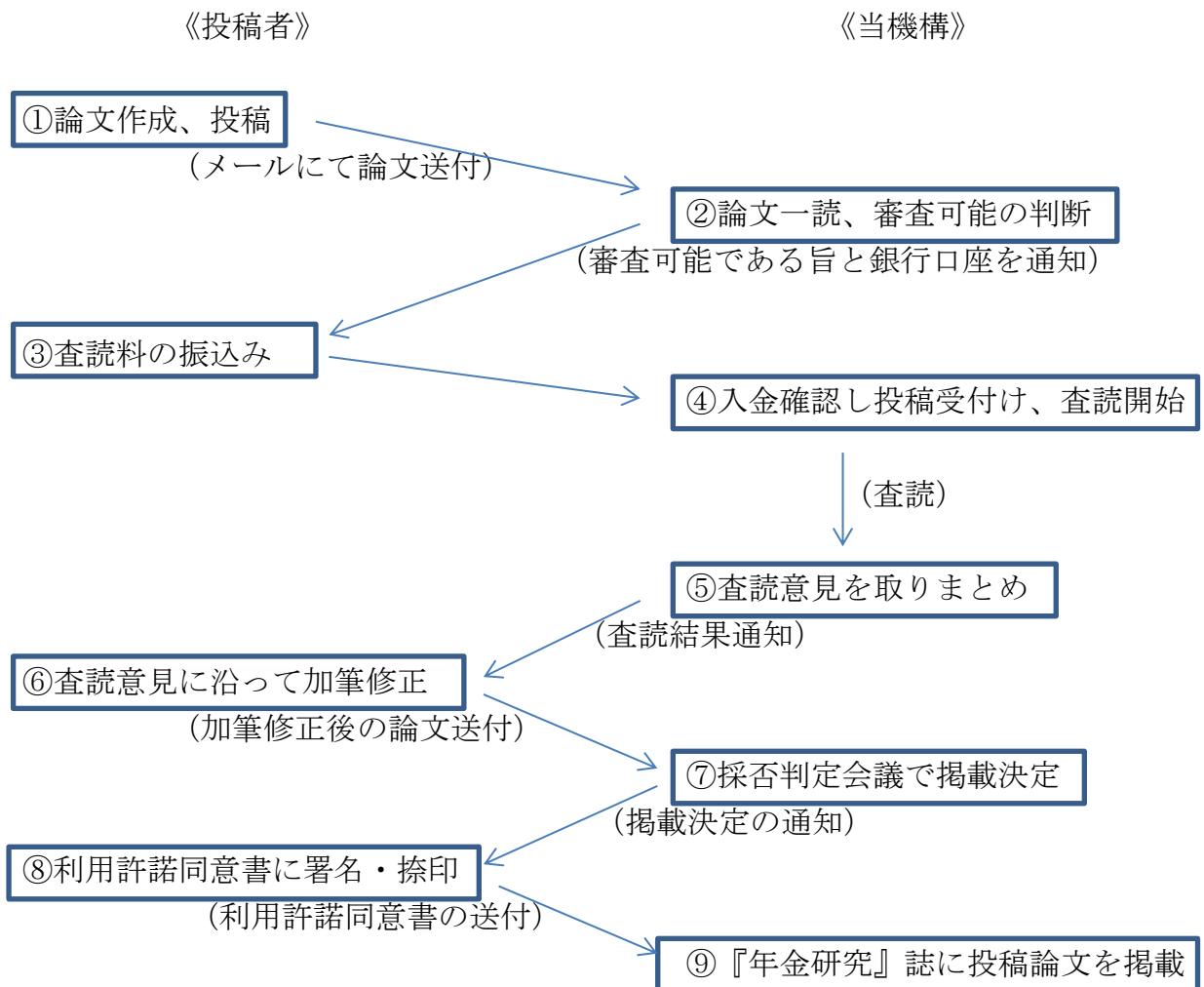
Eメール toukou@nensoken.or.jp

投稿論文（図表以外）は原則としてワードファイルで作成し、それを PDF ファイル形式にしてメール添付でご送信願います。

10. 原稿到着後、当方で一読後、審査可能であると判断された場合、その旨返信メールでご連絡します。なお、この判断は「原稿作成マニュアル」に沿っているかといった形式面のチェックに主眼が置かれます。
11. 審査可能のメール連絡を受けたときは、同メールでお知らせする銀行口座に査読料（1論文につき2万円）をお振り込みください。ただし、次のいずれかに該当する方が作成された論文については、この限りではありません。
 - (1) 当機構所属の研究者
 - (2) 当機構の研究プロジェクト参加者（当該研究プロジェクトの成果を取りまとめた論文に限ります）
 - (3) 大学院生又は大学院修了者であって、35歳未満の方（これに該当される方は、学生証又は修了証書と生年月日が分かる証明書（免許証など）をスキャナーで読み込ませ、メール添付でご送付ください。）
12. 振込（又は11.(1)～(3)のいずれかに該当すること）が確認された時点で、投稿を受けつけた扱いとします。

【参考】

投稿から掲載までの流れ



(備考)

以上は標準的に想定される流れであり、次に掲げるように実際には様々なバリエーションがあり得ます。

- ・ ②では審査対象外と判断される可能性があります。
- ・ ③は一定の条件に該当する方は不要です。
- ・ ⑤では、改稿なしで採択、又は、採択不可という結果になる可能性があります。その場合、⑥のプロセスを経ずに、⑦で掲載決定または掲載不可となる可能性があります。
- ・ ⑥では、査読意見に対する釈明を行い、査読者が了解すれば、加筆修正は不要になります。
- ・ ⑦の前に、再査読が必要と判断される可能性があります。
- ・ ⑦では、査読でのやり取り等を踏まえ、掲載不可と決定される可能性があります。

『年金研究』原稿作成マニュアル（案）

1. 原稿の順番

原稿は、

- ①タイトル(氏名・肩書を含む)
- ②日本語要旨（400～900字）
- ③本文（図表を含む）
- ④脚注（または文末注）
- ⑤参考文献

の順序で作成すること（※）。さらに投稿論文提出時に英文タイトル（氏名・肩書込み）をメールで必ず採否判定会議宛てに連絡する。

※原稿見本（テンプレートつき）参照。

2. 基本構成

節・項は、それぞれに下記のシステムでナンバーをふる。

（ローマ数字の使用や、数字のない節立ては避ける）

例) =====

論文タイトル

氏名・所属先・肩書

要旨

本文

1 はじめに

2 基本モデル

3 実証分析

3.1 推定結果

3.1.1 -----

3.1.2 -----

3.2 推定結果の解釈

3.2.1 -----

3.2.2 -----

4 おわりに

参考文献

※図表は、それぞれに通し番号を付けて本文中に挿入すること。

図1. タイトル

図2. タイトル

表1. タイトル

表2. タイトル

=====

3. 文章表記

- (1) 横書き、新かなづかい、新字体使用を原則とする。当用漢字を中心とし、むずかしい漢字は避ける。
- (2) 句読点はカンマ（、）とピリオド（。）とを併用する。
- (3) 傍点は当該する文字の上に打つ。
- (4) 引用文には「 」や『 』を使用する。クォーテーション・マーク（‘ ’や“ ”）も使用可。

4. 数字の表記

- (1) 原則として算用数字を使用する。和数字の使用は熟語・成句・固有名詞に限る。
(例1) 1つ、1点、1人当り3g、第2に、第2次世界大戦、前2者、2通り、4捨5入、
5・15事件、16～7世紀、3・4日
(例2) 一定、均一、一致、一般、一応、一義的
(例3) 第1四半世紀、第2四半期
- (2) ただし、以下は上記(1)の例外とする。
*概数にあつては、和数字を用いる。
(例4) 数十日間、数百キログラム、百数十ページ、何千人
*化合物の名称には和数字を用いる。
(例5) 一酸化炭素、四三酸化鉄
- (3) 大きな数字を使うときは、兆・億・万の単位語を入れた方が読みやすい（そのさいは、位取りカンマは使用しない）。
(例6) 38億8823万人、7万6000人
- (4) O（オー）と0（ゼロ）、1（エル）と1（イチ）は、区別がつきにくい活字を使用した場合のみ、その区別を欄外に明示すること。

5. 数式

- (1) 原則として変数はイタリック表示とする。
(例) x 、 y 、 z ； X 、 Y 、 Z ；
- (2) ベクトルはゴシック表示にする。
(例) **aaa**、**bbb**、**ccc**；**AAA**、**BBB**、**CCC**；
- (3) 数式を1行に詰めすぎないようにする。
- (4) 複雑な添え字（suffix）は、できるだけ避ける。

6. 注の表記

注は、内容注のみを原則、脚注として記述する。ただし、注を文末にまとめて記載しても構わない。なお、引用箇所を表示は、注ではなく、本文中で行う。

(例) 「……」というのが、高山憲之の見解である（高山(1997)、p.36）。

7. 図・表の作成

- (1) 図表は執筆者が自らエクセルを用いて作成し、本文中に挿入する。
- (2) 図表のみカラー使用可。

8. 参考文献

(1) 参考文献（通常の出版物、雑誌論文）は、論文の最後に、文末注に続けてリストの形で作成する（注での文献表示は避ける。ただし統計報告書・新聞・政府文書等はこの限りではない）。文献リストには通し番号をつけない。

(2) 文献は、日本語、英語・独語・仏語、ロシア語、中国語、その他にグループ分けして列記する。日本語文献は筆者氏名のアイウエオ順、それ以外はアルファベット順に整理する。

(例) 参考文献

鈴木興太郎 (1998) 「機能・福祉・潜在能力：センの規範的経済学の基礎概念」『経済研究』49(3)、pp.193-203.

高山憲之・有田富美子(1996)『貯蓄と資産形成：家計資産のマイクロデータ分析』岩波書店。

Harvey, A. C. (1981), *The Econometric Analysis of Time Series*, Oxford: Philip Allan.

Leontief, W. (1974), “Structure of the World Economy,” *American Economic Review*, 64(6), pp.823-834.

(3) 書物名は、日本語・中国語等の場合は『 』、ヨーロッパ語ではイタリック。

(4) 論文名は、日本語・中国語等の場合は「 」、ヨーロッパ語では“ ”で囲む。

(5) 文献は次の順序で表記する。

単行本： 著者(編者)名、発行年、書物名(副題とも)、発行地、発行所。

論文： 著者名、発行年、論文名、収録書物の著者(編者)名、収録書物名（または雑誌名）、巻号、ページ数。ただし、発行地、発行所、巻数、号数、発行年月のうち、不必要なものは省いてもかまわない。例えば《東京：岩波書店》は単に《岩波書店》として差し支えない。

(6) 自著であっても、「拙著」などとせず、他文献と同様に表記する。

(7) 本文中に引用する場合は、名字のあとに発表年を丸カッコ（ ）で囲って入れる（各文献には通し番号をつけない）。

(例) 福山 (2015)

Inagaki-Oshio (2015)

9. 校正時の修正

校正段階（執筆者の校正は原則として初校のみ）での修正は、数値情報のアップデートおよび不備の訂正のみとする。校正段階で大幅に内容を変更する場合、その変更は改めて審査の対象となる。注意すること。